広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	enclitic copula -àmの接辞されたシュメール語の疑問詞の位置について
Author(s)	峯, 正志
Citation	ニダバ , 20 : 29 - 37
Issue Date	1991-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047217
Right	
Relation	

論　文

enclitic copula -àmの接辞されたシュメール語の疑問詞の位置について

峯　正志

1　はじめに[1)]

シュメール語には、enclitic copula と呼ばれる -àm という要素がある[2)]。これはその名の示すとおり、基本的にはコピュラとして用いられる。例えば次の例がそうである。

^{d}nanše-mu du$_{11}$-ga-zu zi-dam　(Gud.Cyl. A.4.10)

ナンシェ「私の」「言葉」「汝の」「誠実」-àm

「私のナンシェ神よ、汝の言葉は誠実である。」

しかし、この要素は、コピュラ的用法以外にも多様な用法を示す[3)]。例えば、動詞の接尾辞のように用いられる用法や、序数詞を形成する用法。また、「強調」を示す用法や、普通の動詞のように用いられる用法もある。これらの多様な用法をどのように統一的に説明するかということは、シュメール語学のこれからの課題のひとつである。

さて、その多様な用法のなかに、疑問詞に接辞される用法がある。これは基本的には、「強調」を示す用法に分類されると思われる[4)]。筆者は本稿において、この用法に焦点を当て、従来見過ごされてきた文法現象がシュメール語に存在することを指摘してみたいと思う。それは、この enclitic copula が疑問詞に接辞されたときの、文中における語順の変化についてである。そこで、まず第２章において、シュメール語の疑問詞の位置について述べ、それから、第３章で enclitic copula の接辞された疑問詞の位置を述べ、その語順の変化を例示してみたいと思う。

2　シュメール語における疑問詞の位置

シュメール語の疑問詞の位置については、言及されることは少ないけれども、シュメール語学者の間での意見の一致は見られるように思われる。筆者の知るかぎり、次の２箇所に記述が見られる：

まず、R.Jestin(1951) p.60 に次の記述がある。

> Ils (筆者：Les pronoms interrogatifs) se placent immédiatement devant le verbe: ta-àm (-àm suffixe emphatique-pausal) e-ra-an-dug$_4$ 《que t'a-t-il dit? 》[5)]

また、Falkenstein(1959) p.34 には、次の記述がある。

Es（筆者：Das Fragepronomen) steht regelmässig vor dem Verbum.

このように、疑問詞が動詞の直前に位置するということは認めて良いように思われる。実際、後に例文を見ると分かるが、ほとんどの例でこれは通用する。

さて、疑問詞が動詞の直前に位置するというのは、言語の類型としては珍しいことではない。例えば、そのような言語の代表的な例としてはトルコ語がある。またペルシャ語、パシュトー語、ウルドー語等のインド・イラン諸語、またセム語では、アムハラ語がこの類型の言語に属する[6]。シュメール語も、このような言語のひとつに数えてもよいと思われる。

以下に、シュメール語における疑問詞の位置を示す例文を挙げる。どのような疑問詞でも動詞の直前に位置するということを示すために、疑問詞の品詞・文法機能別に分類して挙げてみた。

＊主語

(Wilcke 1969)

1.88 amar-mu gùd-ba a-ba-a ba-ra-ab-tùm

"Wer hat mein Junges aus seinem Nest herausgenommen?"

(Klein 1981)

1.14 lugau-mu za-gim a-ba an-ga-kalag a-ba an-ga-a-da-sá

"O, my king, who is as mighty as you, and who rivals you?

＊直接目的語

(Alster 1972)

1.57 ugᵘ-kú-kú-mu-uš z[a-e] a-ba-a mu-ra-ab-túm

"To you, my *Ukuku*, whom shall I send to you?"

("Elum Gusun: Honored One, Wild Ox" in Cohen 1988)

1.34 a-gal-gal $buru_{14}$ su-su lú ta-zu mu-un-zu

"A flood which drowns the harvest, what can one know of you?"

＊疑問副詞「いつ」「どこ」

(Green 1984)

2a.7 [...l]a-la-a-ni en-na bí-íb-gi_4-gi_4

"...when will its joyous song be heard again?"

(Kramer 1949)

1.1 dumu-é-dub-ba-a u_4-ul-la-la-àm me-šè ì-du-dè-en

"Schoolboy, where did you go *from earliest days*?"

＊疑問副詞「なぜ」

(Wilcke 1969)

1.355 uru-ta á-áĝ-ĝá a-na-aš mu-e-túm

"Warum hast du von der Stadt Bescheid gebracht?"

(Green 1984)

1.19 zi-ga šu-ba a-na-aš ba-ni-ib-dab$_5$ igi-zi a-na-[aš...]

"Rise up! Why did its hand sieze (Uruk)?

Why did the benevolent eye [look away]?"

(Green 1984)

1.21 e-ne ba-ab-te sahar-ra e-ne ba-an-tuš gìr a-na-aš ba-da-zé-er

"That One drew nearer. That One settled upon the ground.

Why should it withdraw?"

このように、どのような疑問詞でも、その文中で占める位置は動詞の直前であることが分かる。

しかし、この規則にも重大な例外がある。それは、動詞が複合動詞の場合である。

この複合動詞というのは、ある特定の名詞または副詞と常に一緒になって現われる動詞のことを指す[7]。例えば、šu～ti という複合動詞は、šu という名詞部分と ti という動詞部分からなる。これらは常に一緒に現われて「受け取る」という意味を表す。

動詞にこの複合動詞が用いられている場合、複合動詞の名詞部分が動詞の直前の位置を占めるため、疑問詞は「動詞の直前」のひとつ手前に位置することになる。いわば、疑問詞は、複合動詞の名詞部分に押し退けられるわけである。

例を挙げよう。次の例では šu～bal という複合動詞が用いられている。

(Wilcke 1969)

1.103 nam ù-mu-tar a-ba-a šu mi-ni-ib-bal-e

"Entscheide ich das Schicksal, wer wird es ändern?"

疑問詞の a-ba-a「誰」が、名詞部分の šu に押し退けられている。

次の3例では、名詞部分は、それぞれ sag, igi, ki-za である。いずれも疑問詞を押し退けて動詞の直前の位置を占めている。

(Green 1984)

la.6 [...]X a-ba-a sag im-mi-tu-lu "...Who was it who confronted...?"

(Falkenstein 1965)

1.95 lugal mu-imin-àm šu sag-gá du$_{11}$-ga a-ba igi im-mi-in-du$_8$-a

"Wer hat je erlebt, daß ein König sieben Jahre lang, das Haupt in die Hand stützte?"

(Hallo & Van Dijk 1968)

1.42 nin kur-ra diri-ga a-ba ki-za ba-an-tùm

"Lady supreme over the land, who has (ever) denied (you) homage?"

このように、動詞が複合動詞である場合には、疑問詞は動詞の直前に位置することが出来ない。しかしながら、複合動詞の名詞部分は動詞の一部分であると考えれば、疑問詞は依然として、動詞の直前にあるといえる[8)]。

最後に、この「疑問詞は動詞の直前に来る」という規則にも例外があるということを示して、この章を締め括りたい。しかし同時に、このような例外は非常に稀なものであるということも付け加えておきたい。

下の２例は、いずれも疑問詞が文頭に来ている。

(Sollberger 1966)

342,10-11) a-na-áš 5 sìla dun g[á-gá-dam](?)

"Why [are] sìla ...[to be] de[posited(?)](?)"

(Klein 1981)

l.15 a-ba za-gim šà-ta geštú-ga šu-dagal mu-ni-in-dug$_4$

"Indeed, who is from birth as richly endowed with understanding as you?"

3 -àm の接辞された疑問詞の位置

では、以下に、enclitic copula -àm の接辞された疑問詞を持つ文の例を挙げてみる。以下の例が示すように、-àm が接辞された疑問詞は文頭に来るのである。これも、疑問詞の品詞や文法機能に関係なく文頭に来ることを示すために、分類して挙げてみた。

＊主語

(Kramer 1951)

l.191 a-ba-àm ki-bi-[š]è(?) ? in-na-an-dug$_4$ al mu(?)-ni-ib-dug$_4$

"Who is it *that*....?" also l.205

(Kramer 1951)

l.275 a-ba-àm lú-kur-ta-e$_{11}$-dè kur-ta silim-ma-ni um-ta-e$_{11}$

"Who of those who have descended *to* the nether world (*ever*) ascend *unharmed* from the nether world!"

＊疑問副詞「いつ」「どこ」

(Wilcke 1969)

l.329 me-na-àm[9)] dili-zu-dè kaskal-e sag ba-ra-mu-ri-ib-ús

"Warum du allein? (Warum) willst du dir niemand für den Weg gesellen?"

＊疑問副詞「なぜ」

(Kramer 1947)

l.172 a-na-aš-àm hur-gim na-KE(?)-en-eš

"Why thus····?"

(Sollberger 1966)

121,6-9) a-na-aš-àm ur-^{d}lama-ke$_4$ ú kú-dè nu-ub-še-ge

"Why is it that Ur-Lama does not allow it(/them) to graze?"

(Sollberger 1966)

166,7-9) a-na-aš-àm dub-mu hé-túmu lú ba-an-dù

"Why is it (that) (although) he did carry my tablet someone detained him?"

(Sollberger 1966)

181,6-7) a-na-[aš-à]m lú ba-an-dù "Why did they detain him?"

(Sollberger 1966)

125,4-6) a-na-áš-àm *púzur-ha-ià* mu še kur-ra-šè še eštu[b] hé-na-sumu

"Why is it (that) Puzur-Haya has given him eštub-barley instead of kur-barley?"

(Cooper & Heimpel 1984)

TRS 73 rev. 1.12 a-na-aš-àm š[ar-ru-ki-in]

"Why does S[argon]?"

("Elum Gusun: Honored One, Wild Ox" in Cohen 1988)

1.31 te-e-àm ama-gan-ra ga-ša-an-sún-na-ra dumu-ni zé-èm-mà na-zé-mèn

"Why won't you hand over to the mother, Ninsun, her child who was taken away?"

(Shaffer 1984) TLB 2,4

1.105 a-na-àm ur$_5$-gin$_7$ ì-ak-en-zé-en "Why have you acted so?"

次の例は、一見すると文頭ではないように見えるが、よく見ると、文頭であることが分かる。これらの疑問詞は、直接話法で表された、文の主語になった人物の発話の中に用いられているものであるが、その発話のなかでは文頭なのである。

(Kramer 1949)

1.35 lu-...-ke$_4$ a-na-aš-àm mà-da-nu-me-a inim íb-ba-e-e-še in-túd-dè-en

"Who was in charge of...(said) "Why when I was not here did you talk?" caned me."

(Kramer 1949)

1.36 lú-PA-mušen(?)-na-ke$_4$ a-na-aš-àm mà-da-nu-me-a gú-zi nu-mu-un-zi-e-še in-túd-dè-en

"Who was in charge of the...(said) "Why when I was not here did you not keep your head high?" caned me."

(1.37～39も同様の例が続く。)

このように、enclitic copula -àm が接辞された疑問詞は文頭に来る。

しかし、これにも例外はある。次の２例はその例外である。

(Alster 1972)

l.52 ki-gub-ba-zu a-na-àm mu-ra-an-dab$_5$ a-[r]á(?!)-bi a-na-gin$_x$-nam

"your position, what (luck) did it *provide* to you,

its *account*, what is it like?"

(Kramer 1949)

l.3 é-dub-ba-a a-na-àm ì-ag "What did you do in school?"

いくらかの例外は存在するものの、これらの例により、文頭にくる「強い傾向」があることは明らかであろう。

4 新しい時代に書かれたテキストの信頼性

第２章、第３章で述べてきたことは、ウル第３王朝期から古バビロニア期くらいにかけてであれば、大体の場合で通用するように思われるけれども、テキストの書かれた時代が新しくなればなるほど、「例外」を示すようである。特に、-àm の接辞された疑問詞の場合は、あまり文頭に出なくなるようである。そのような場合には、複合動詞でさえも、「例外」を示す場合がある。

次の３例は、-àm の接辞された場合の例外である。

(Krecher 1966)

VIII.l.5 [ù-m]u-un šà-ba-na ta-àm m[a-al-la-bi]

l.6 ^{d}mu-ul-líl-le $^{u\check{s}-tu\,[g]}$PI-k[ù](nicht g[a])-ga-na

ta-àm (an ga-mu-)ri-a-bi

"Der Herr---, was h[at] er in seinem Herzen?

Mullil---, [was hat er in seinem] reinen Sinn?"

(Van Dijk 1983)

l.59 * ^{d}[nin-urta en dumu]-^{d}en-líl-lá-ke$_4$ a-n[a-à]m zi-ga mu-un-[gi$_4$?]

^{d}II *be-lu ma*[*r šá*] ^{d}II *mi*-[*nu-u te-bu*]-*tu uš-ha-r*[*a-mat*]

"Ninurta, Seigneur, fils d'Enlil, qu'est-ce qui jamais a pu rejeter son assaut?"

l.187 * nitadam-mu dumu-mu la-ba-tuš gá-e a-na-àm mu-un-ak-a

hi-ir-ti ma-ri ul a-šib a-na-ku mi-na-a ep-pu-uš

"Mon épouse, mon fils n'est plus là, moi,

qu'est-ce qui peut me soutenir?"

次の２例は、複合動詞の場合の例外である。

(Cooper 1978)

l.124 * ní-me-lám an-gim dugud-da-mu-dè sag a-ba mu-un-gá-[gá]

a-na- pu-luh-ti me-lam-me-ia šá ki-ma ᵈa-nim kab-tú

man-nu[10] *i'-ir-m[a]*

"Who can confront my awesome radiance, heavy as heaven?"

(Krecher 1966)

VII.1.31 mu-lu ér-re in-kúš-ù-na ér-re u_4 te ba-zal

"(Sie,) die das Weinen bedrückt---,

welche Zeit (soll) dem Weinen (noch) vergehen?"

上の２例では、いずれの例も疑問詞が複合動詞の名詞部分を押し退けていることが分かる。

時代の新しいテキストを扱う場合には、これらの点に特に注意を要する。

5 結論

本稿の考察で明らかになったことをまとめてみよう。

シュメール語の疑問詞の位置は、Jestin(1951) や Falkenstein(1959) が述べているように、動詞の直前に位置する。しかしこれには例外がある。ひとつは複合動詞の場合で、疑問詞は複合動詞の名詞部分を越えることは出来ない。そして、もうひとつは enclitic copula -àm の接辞された場合で、この場合は、-àm の接辞された疑問詞は文頭にくる強い傾向を示す。以上のことを簡単に図示すると下のようになる。

＊疑問詞の位置：動詞の直前（但し、複合動詞の名詞部分は越えない。）

[・・・・・ 疑問詞 （複合動詞の名詞部分） 動詞] s

＊ -àm の接辞された疑問詞の位置：文頭にくる強い傾向

[疑問詞-àm ・・・・・ （複合動詞の名詞部分） 動詞] s

6 おわりに

本稿では、enclitic copula が接辞された疑問詞は文頭にくる傾向があるという、事実を指摘するにとどまった。これをもとにこの enclitic copula の統語的機能の解明がこれからの課題となるであろう[11]。

註

1）この論文は、平成２年９月１５日に広島大学において行なわれた第２０回西日本言語学会（於広島大学）において、「シュメール語における enclitic copula -àm の機能に関する一考察」と題して口頭発表したものに加筆、修正したものである。

2）正確に言うと、-àm のみが enclitic copula と呼ばれているわけではない。この要

素は人称、数に応じて活用するが、その３人称単数形の -àm のみが、ここで挙げたような多様な用法を見せるのである。

3）詳しくは、峯(1985) 第２章参照のこと。

4）その証拠の１つとして、疑問詞に接辞された -àm が、アッカド語で、「強意」の接尾辞とされている -ma で訳されているという事実がある。峯(1985) p.43～45 を参照のこと。

5）Jestin は、この記述における例文に -àm の接辞されたものを用いている。これは明らかに、筆者が本稿で述べる現象に Jestin が気付いていないことを物語っている。

6）インド・イラン諸語については縄田鉄男教授（熊本大学）、アムハラ語については、佐藤道雄氏（広島大学大学院）の御教示による。

7）Falkenstein(1978) I.p.118ff.および II.p.58ff.または Falkenstein(1959) p.41ff を参照のこと。

8）従来複合動詞として扱われてきたものの中に、この規則が当てはまらないものがあるように思われる。つまり、名詞部分が疑問詞に、逆に押し退けられてしまうものである。従って、複合動詞にも様々な段階のものがあると考えられる。

また、次の例のような動詞の場合は、所有接尾辞（-bi）や格語尾（-šè）が名詞部分（KU）に付いており、従来複合動詞とは考えにくかったが、疑問詞が飛び越えていないところから、複合動詞である可能性も考えられる。

(Green 1984)

1a.5 [...]-bi giš im-mi-gul [...] a-ba-a KU-bi-šè mu-un-gi$_4$

"...was destroyed --- who was it who restored ...?"

9）註によると a-na-aš-àm の版もあるということである。

１０）アッカド語では、疑問詞は通常文頭にくる。例えば、von Soden(1969) p.181 §127 b) または、p.206 §153 b) などを参照のこと。しかし、この例に見られるように、２ヶ国語碑文では文頭でない位置にも現われうる。これが、上欄に書かれたシュメール語の干渉によるものかどうかは分からないが、いずれにしても、２ヶ国語碑文をアッカド語の資料にする際には注意を要する。

１１）筆者は、今のところ、「焦点」を示す機能を持っているのではないかと考えているが、これはいずれ、別の機会に論じようと思っている。

引用文献

Falkenstein, A. 1959 "Das Sumerische" in *Handbuch der Orientalistik*. I, 2 Leiden

_____ 1978 *Grammatik der Sprache Gudeas von Lagaš*. I, II. (Zweite Auflage) Roma

Jestin, R. 1951 *Abrégé de Grammaire sumérienne*. Paris.

峯正志　1985. シュメール語における enclitic copula の研究　広島大学文学研究科修士論文
von Soden, W. 1962 *Grundriss der Akkadischen Grammatik* AnOr 33/47 Roma

引用テキスト

Alster, B. 1972 "Ninurta and the Turtle, UET 6/1 2" JCS Vol.24 p.120～125
Cohen, M.E. 1988 *The Canonical Lamentations of Ancient Mesopotamia* Vol.I Potomac, Maryland
Cooper, J.S. 1978 *The Return of Ninurta to Nippur* AnOr52 Roma
Cooper, J.S. & Heimpel, W. 1984 "The Sumerian Sargon Legend" in *American Oriental Series* Vol.65 p.67～82 Winona Lake, Indiana.
Falkenstein, A. 1965 "Fluch über Akkade" ZA 57 p.43～124
Green, M.W. 1984 "The Uruk Lament" JAOS Vol.104 No.2 p.253～279
Hallo, W.W. & Van Dijk, J.J.A. 1968 *The Exaltation of Inanna.* New Haven & London
Klein, J. 1981 *Three šulgi Hymns.* Ramat-Gan, Israel
Kramer, S.N. 1947 "Gilgamesh and the Land of the Living" JCS Vol.I.No.1 p.3～46
———— 1949 "Schooldays: A Sumerian Composition Relating to the Education of a Scribe" JAOS 69 p.199～215
———— 1951 "Inanna's Descent to the Nether World" Continued and Revised. JSC Vol.V.No.1 p.1～17
Krecher, J. 1966 *Sumerische Kultlyrik* Wiesbaden
Shaffer, A. 1984 "Gilgamesh, the Cedar Forest and Mesopotamian History" in *American Oriental Series* Vol.65 p.307～313 Winona Lake, Indiana
Sollberger, E. 1966 *Texts from Cuneiform Sources Vol.I (The Business and Administrative Correspondence under the Kings of Ur)* New York
Van Dijk, J. 1983 *LUGAL UD ME-LÁM-bi NIR-GÁL* Leiden
Wilcke, C. 1969 *Das Lugalbandaepos* Wiesbaden